日本の言語地理学の歩み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17866

日本の言語地理学の歩み

大西拓一郎(国立国語研究所)

1. はじめに

日本では，世界的に見てもかなり早い時期から全国規模の言語地図が編集されており，これまでに作成されてきた地図の量も相当な数にのぼる。研究の世界では，言語地図に基づく言語地理学的研究は，1970～1980 年代に多くの研究成果をあげ，大きなトレンドとなったが，その後下火になり，現在に至る。本発表では，このような日本の言語地理学の流れを概観し，言語地理学や方言学に課せられているのは何であるのかを考える。

2. 分布調査のはじまり—音韻分布図・口語法分布図—

日本における方言調査とそれに基づく言語地図の作成は，文部省に設置された国語調査委員会により，1903 年に刊行された『音韻分布図』と『口語法分布図』にはじまる(図 1)。その目的は，近代国家として全国に通じる標準言語の確立にあった(その目的が十分に達成されたかどうかは疑問が残る)。この研究のもっとも大きな成果は，日本語には東と西で大きな異なりがあり，その境界線は中部山岳地帯に近いところに存在することの発見にある。

図 1 口語法分布図：動詞否定辞

3. 方言学の誕生—方言区画と方言周圏論—

全国的な分布が示されたことは，日本全国にどれだけの方言が存在するかという方言学の基本的なテーマに対する手がかりを与えた。東条操が提唱した方言区画論は，この成果を基盤とするもので，日本の方言学が目指すひとつの方向を示した。しかし，方言区画論は，どのようにして方言が形成され，分布をどのように読み取るかの具体的方法を示すには至らなかった。

それに対し，民俗学者の柳田国男は独自の通信調査をもとに，1930 年に『蝸牛考』を著し，「かたつむり」の分布をひとつの例として，方言周圏論を提唱した。それは次のように要約できる。

日本全国には「かたつむり」を表す，さまざまな方言形が分布する。これらは千年近く歴史的中央であった畿内から発したものが徐々に周辺部に向けて広がっていったものである。したがって，

中央で生じた時系列上の変化が，中央からの距離に応じた分布に映し出されている。

この柳田の方言周圏論は次の 2 点において，多くの人を惹きつけた。第 1 点は，方言の分布を動的にとらえた点であり，空間的距離と歴史的時間の関係をダイナミックに説明する理論として魅力を備えていた(図 2)。第 2 点は，「田舎のことば」としてさげすまされてきた方言に対し，中央の失われた姿を今に伝えるものとしての価値を与えたことである。後者は，柳田民俗学の核心にあたる民俗学という学問を通した「経世済民」(世を治め，民を救う)という実践的思想と無関係ではない。

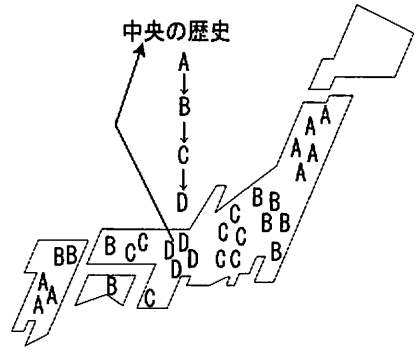

図 2 方言周圏論のモデル図

東条と柳田の間では，方言学の目指すところが，方言区画論なのか方言周圏論なのかで議論が戦わされる。ともかくも，この時期(1930 年代)に日本の方言学は大いに盛り上がりをみせたことは確かであり，『方言』という専門の月刊誌も刊行された。

なお，同時期に，ドーザ(1938)を通して，フランスを中心としたヨーロッパの言語地理学も紹介されている。しかし，それはまだ，日本語の方言分布の具体的な分析には結びつかなかった。

4. 言語地理学の確立—柴田武・グロータース・馬瀬良雄・LAJ—

「言語地理学」という名のもとで具体的に大きな成果を成果があげられるのは，1960 年代後半になってからである。とりわけ重要なのは，柴田武により 1969 年に著された『言語地理学の方法』である。ここで柴田は，第一に，言語地理学の目的を言語史研究の方法として明確に位置付けた。第二に，柳田の方言周圏論を引き継ぎながらも，それに対する科学的モデル化を行い，新潟県糸魚川地方での臨地調査に基づく言語地図をもとに，分布から言語変化を読み取る具体的な手続きを提示した。

その手続きにおいて，重視され，その後の研究に大きな影響を与え続けたのは，次の二つの原則である。ひとつは，「隣接分布の原則」であり，対象地域の文化的中心地から順にa－b－cと分布が見られる場合の歴史は，c→b→aとして再構されるというものである。もうひとつは，「周辺分布の原則」であり，文化的中心地をはさんでa－b－aと分布が見られる場合の歴史は，a→bであるとするものである。

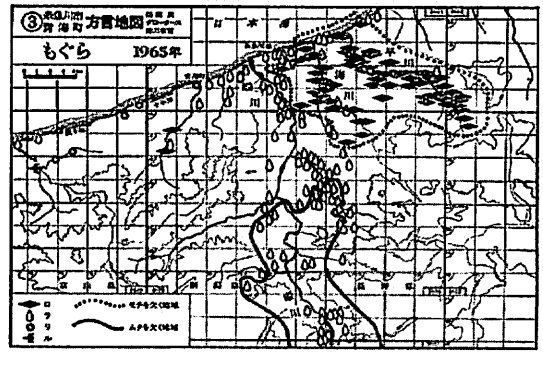

図 3 グロータースによる解釈図(グロータース 1976)

地図の描き方においては，ベルギー出身の神父 W.A.グロータースがもたらした方法の影響が大きい(グロータース 1976)。調査地点に対し，語形に対応した記号，しかも歴史的解釈を反映さ

せた記号をおいていくという作図法は，ここに確立する(図 3)。

また，共同研究者の馬瀬良雄は，方言どうしの接触がもたらす変化に対し，同音衝突・混交・類音牽引・民間語源といったヨーロッパにおける言語地理学の概念と方法を活用しながら研究を進める(馬瀬 1969)。以上のように柳田以来の考え方とヨーロッパで展開してきた言語変化に対する考え方が結びつくことで，日本の言語地理学は，大きく花開いた。

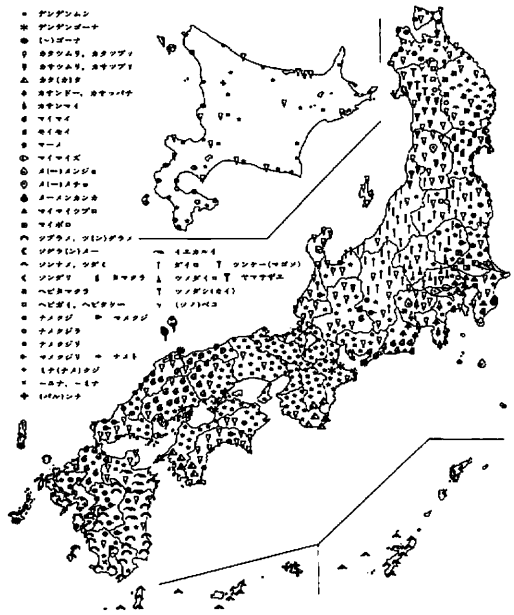

図 4　LAJ かたつむり(略図)

このような中で，国立国語研究所による全国 2400 地点を対象とした調査が 1957～1965 年に行われ，『日本言語地図』(Linguistic Atlas of Japan; LAJ)全 6 巻として 1966～1974 年に刊行される(図 4)。それに刺激されるかのように，小地域を対象とした調査も各地の大学研究室や地元の研究者たちによって実施され，多くの言語地図集が編集された。その数は400 冊以上にのぼり，地図の枚数も 2 万枚近くになる。学会においても多数の発表がなされ，1970 年代から 1980 年代にかけて，日本の言語地理学は最盛期を迎えた。

5. 文法の地域差へ—GAJ—

LAJ が対象としたのは，「かたつむり」「つらら」「とうもろこし」など，主に語彙であった。国立国語研究所は，LAJ の成果を受けながら，文法を対象とした全国分布図を描く新計画を立てた。1979～1982 年に全国 807 地点で調査を行い，1989～2006 年に刊行されたのが『方言文法全国地図』(Grammar Atlas of Japanese Dialects; GAJ)全6巻である(図 5)。

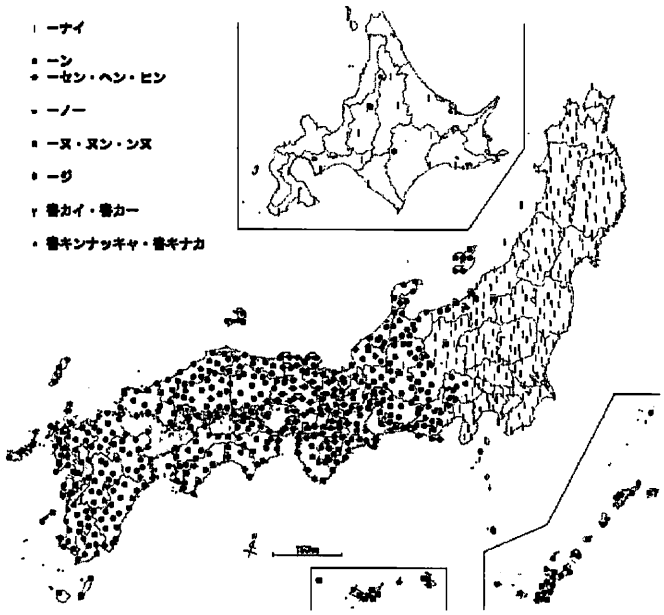

図 5　GAJ 動詞否定辞(略図)

LAJ は，言語史研究を目的とする言語地理学的手法に根ざした解釈にかなり重点をおいていた。そのため，ややもすれば，編集担当者の解釈的意図を反映した作図が行われていたことは否定できない(佐藤 1990)。GAJ はその反省に立ち，編集のための厳密なマニュアルを作成し，

客観的手法(検証・追試が可能な科学的手法)でデータを整理し，地図とともに調査データを公開することを重要視して編集を進めた。このようなことから，LAJは解釈地図と呼ばれ，GAJは資料地図と呼ばれる。

ところが，GAJ が編集・刊行を続けたこの時期，日本の言語地理学は次第に下降線をたどっていく。その背景の一つは，方言学のトレンドが，日本語学の研究の流れに対応して，文法研究に移行したことがある。しかし，それだけではないはずで，言語地理学の内部にも事情が求められる。第 1 点は，分布が中央の反映という考え方がいつまでも魅力を保てなかったことである。これは見方をかえれば，方言を視野に入れているにも関わらず，言語地理学＝文献を対象とした国語学(伝統的な立場の日本語学)の補助学という見方を生じさせてしまった可能性を示唆する。もう 1 点は，地図を読むための方法が限定されていたということである。『言語地理学の方法』が重点を置き，モデル化した「隣接分布」「周辺分布」といった分析手法は，分布の「配列」を基盤とするものであった。すなわち，a－b－cやa－b－aといった配列に基づき解釈することを原則とする。これだけでは，言語ならびに言語変化の背景にある人間間の交流や物流，自然的条件などといった言語外の情報に対処できないことは当然である。しかしながら，言語外の情報を客観的に取り扱う具体的手法が方言学者にはなかった。

6. 地理情報の発見

方言に関する情報は，言語に関する情報とそれが使用される場所に関する情報を兼ね備えていることが必須である。場所に関する情報が必ず付加されている点が，通常の言語情報と異なる点である。例えば，「捨てる」という語に関して，いくつかの地点を対象に方言情報を集めるなら，次の表 1 のようにデータが集積される。

表 1

場所情報	言語情報	
	意味	語形
宮城県仙台市	捨てる	NAGERU
石川県金沢市	捨てる	HORU
岐阜県岐阜市	捨てる	HOKARU
福井県福井市	捨てる	HOORU
長野県諏訪市	捨てる	BUCHARU
奈良県奈良市	捨てる	HOKASU
大阪府大阪市	捨てる	HOKASU

これは，場所と言語の情報を併せ持ったデータベースである。このようなタイプのデータベースは一般に「地理行列」と呼ばれる。実は，言語地図というものは，このようなデータベースを地図の

形で表現したものにほかならない。言語地図は，地図一般の中では，主題図と呼ばれるものに分類される。このことが示すように「主題」，つまりどのような観点でデータを扱うかにより，描画される図は異なってくるものなのである。ここから理解されるように，もっとも肝心なのは，地図のもとになるデータベースである。

上記のデータでは場所に関する情報を地名で表したが，場所情報は，表 2 のように数値化して扱うことができる。場所を数値化するというのは，普遍的な座標である経度緯度として扱うことに等しい。このことで，方言情報は，より一般性を持った「空間情報(地理情報)」となる。

表 2

場所情報			言語情報	
地名	経度 (東経，単位：度)	緯度 (北緯，単位：度)	意味	語形
宮城県仙台市	140.85	38.27	捨てる	NAGERU
石川県金沢市	136.65	36.57	捨てる	HORU
岐阜県岐阜市	136.77	35.43	捨てる	HOKARU
福井県福井市	136.21	36.07	捨てる	HOORU
長野県諏訪市	138.12	36.03	捨てる	BUCHARU
奈良県奈良市	135.82	34.68	捨てる	HOKASU
大阪府大阪市	135.52	34.68	捨てる	HOKASU

このように場所の情報を空間情報としての普遍的形式のデータに変換することで，言語外の情報と照合することが可能になる。それを具体的に実現する手段が，地理情報システム(Geographical Information System; GIS)である。

GIS は，地図描画を行うことができるが，それ自体が目的ではない。言語地図としての様式・見映えを重視するなら，むしろ，言語地図の描画に目的を特化したプログラムの方が優れている。GIS は，諸種の地理情報を照合し，相互の関連を分析していくための道具であり，手段である。

例えば，GIS を利用すれば，日本語方言の分布類型において，重要でありながらも成因不明の東西対立の代表である動詞否定辞の分布を，図 6 のよ

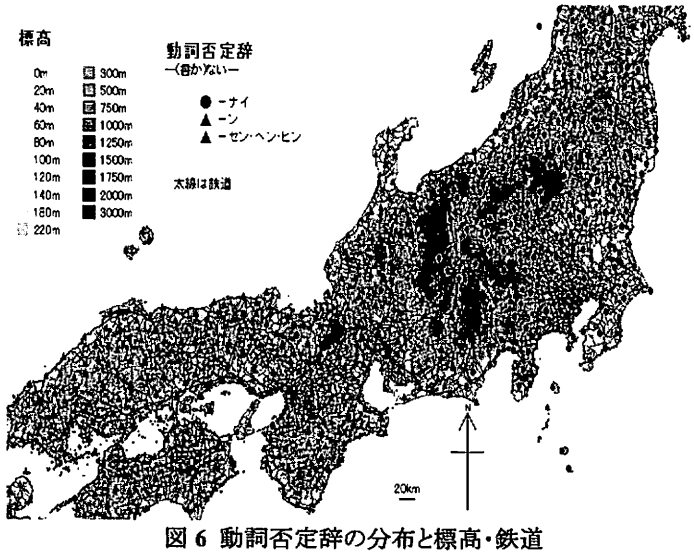

図 6 動詞否定辞の分布と標高・鉄道

うに標高や交通路との関係でとらえることが可能である(大西 2004)。このような扱いを通すことで，成因に関する考察に向けての大きな手がかりを与えてくれる。

また，家族内での尊敬語の使用を見るなら，言語形式の分布自体も興味深いが，世帯あたりの人数から推定される家族制度との相関が注目される(図 7)。方言の分布は，ことばの歴史を反映するもののみではなく，地域社会の特性を考える上での重要な鍵にもなりえることを示していると言えるだろう。

図 7 父親への尊敬語と 1 世帯あたり人数(大西 2007)

(左:西日本，右:東北)

ここで GAJ に話を戻そう。実は GAJ は，単なる地図集ではなく，30 万件以上のデータから構成されるデータベースでもあり，電算化データは，次の web サイトで公開している。

http://www.kokken.go.jp/hogen

このデータは，GIS を用いた分析に活用可能である。見方を変えるなら，このようなデータベースがなければ，方言情報を地理情報のひとつとして GIS を用いた分析にかけることはできない。方言学を言語研究の枠に閉じこめるのではなく，地理情報科学・空間情報科学という 21 世紀における新しい融合的学問分野(岡部 2001，Longley et al 2001)に解放する道を開くのが GIS にほかならない。

7. むすび

日本の方言学における地理的な分布を対象とする分野の歩みを概観してきた。大きくまとめるなら，20 世紀初頭の分布の発見に始まり，20 世紀半ばから後半にかけては継続的に行われた分布の法則の構築・整備・適用で盛り上がりを見せ，21 世紀に入った現在は新たな分析道具の導入でこれまでになかった方向への展開を見せようとしている。

これからこの分野で求められるのは，次の 2 点であると考えられる。

第 1 点は，過去の蓄積のデータ化である。これは LAJ を含め，地図のみで公開されている分布資料をデータ化することで生かしていくことを意味する。

第 2 点は，現時点の状況を詳細に知るためのデータの収集である。LAJ や GAJ だけでは調査項目が十分でない。また，男女差や世代差を含めた社会的属性を多様化させた情報も不足している。これらを充足させるためには新たな調査が必要なのは当然であり，どのような方法で新規の全国調査を展開していくのが最善の道であるのかを検討することが現在の課題である。

同時に，忘れてはならないことがある。それは，方言というものは，そもそも書かれざることばであり，いずれ消え去る運命にあるということである。その点において，フィールドワークを通した方言分布情報の収集は，多少の差はあれ，危機言語の記録という性格を帯びる。そして，それを実行

する方言学者は，常にその使命を担うものなのである。

[文献]

大西拓一郎(2004)「地理情報システム(GIS)を利用した日本語研究」『日本語学』23-15

大西拓一郎(2007)「方言分布の解明に向けて—原点に帰る言語地理学—」『日本語科学』21

岡部篤行(2001)『空間情報科学の挑戦』(岩波書店)

W.A.グローターース(1976)『日本の方言地理学のために』(平凡社)

佐藤亮一(1990)「『方言文法全国地図・第一集』を刊行して—その特徴と問題点—」『玉藻』25

柴田武(1969)『言語地理学の方法』(筑摩書房)

ドーザ(1938)『言語地理学』(松原秀治訳，冨山房，後年，改訳:ドーザ(1958)『フランス言語地理学』(松原秀治・横山紀伊子訳，大学書林))

馬瀬良雄(1969)「言語地理学—歴史・学説・調査法—」『方言研究のすべて』(『国文学　解釈と鑑賞』34-8，至文堂，馬瀬 2002 に再録)

馬瀬良雄(2002)『言語地理学研究』(桜楓社)

柳田国男(1930)『蝸牛考』(刀江書院，後に岩波文庫所収)

Longley,P. A., Goodchild, M. F., Maguire, D. J. and Rhind, D. W. (2001) *"Geographic Information Systems and Science"*, West Sussex: John Wiley & Sons.